＜前回：近代文学２・フランス文学＞

（１）アンドレ・ジッド

０．フランス文学とキリスト教

フランス革命と実証主義哲学（コント）による打撃、十九世紀におけるカトリック復興

１．アンドレ・ジッド(1869-1951)

キリスト教と近代の緊張、そこにおける人間の誠実と自由の追求（ヒューマニズム）

ローマ・カトリック的伝統とフランス革命

２．『狭き門』(1909)：ジェロームの回想とアリサの日記

３．キリスト教的生の理想（修道的）と世俗的生（恋愛・結婚)。

カルヴァン→ヤンセン(ジャンセニスム)：神の恩寵の意味の絶対化と人間の非力さの強調、人間の自由意志を軽視。17 世紀にフランスで流行。

女子修道院ポール・ロワヤル修道院、パスカル ←→ イエズス会

４．ヨーロッパの愛の伝統、宮廷的愛と結婚

５．ジッドとカトリック→フランスにおけるプロテスタントの位置

・『法王庁の抜穴』(1914) ・『田園交響楽』(1919)

４．一つの現実・言葉（ジェロームとアリサ、ジュリエット姉妹）と内面のずれ。

二つの視点から一つの出来事を描く。→ 近代文学の手法

５．『一粒の麦もし死なずば』(1920/21)

「『誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし』」(文語訳)

６．自伝的告白文学：告白と誠実さの理想、アウグスティヌス → ルソー →ジッド

（２）アルベール・カミュ（Albert Camus、1913-1960）

０．フランスの小説家、劇作家、哲学者（学位論文「キリスト教形而上学とネオプラトニズム」)。

１．不条理：人間の生きる現実、そして近代世界を生きる人間の状況（ドストエフスキー）

「この世界は理性ではわりきれない」が「人間には明晰さを求める死にものぐるいの願望がある」、この対立状況が不条理。無意味な世界で意味を求める。

２．『異邦人』(1942)

・「自分の真理のために社会によって殺される「現代のキリスト」ムルソー」(山本、109)

・アルジェのムルソーのもとに、母（ママン、「無神論者ではなかったが、生きているうちに決して宗教のことを考えていなかった」10）の死亡電報が、養老院から届く。母の葬式のために養老院を訪れたムルソーは、涙を流すどころか、特に感情を示さなかった。友人のトラブルに巻き込まれ、アラビア人を殺す。逮捕され、裁判にかけられる。裁判では、母親が死んでからの行動が問題となる。人間味のかけらもない冷酷な人間であると糾弾される（「感動を示されないこと、母の年齢を知らなかったこと、翌日女と海水浴にいったこと、フェルナンデルの映画、最後に、マリイをつれて部屋へ帰ったこと」126)。裁判の最後では、殺人の動機を「太陽が眩しかったから」と述べた。死刑の宣告。「暑さ」「考える暇がなかった」。

３．『シーシュポスの神話』(1942)

・「真に重大な哲学上の問題はひとつしかない。自殺ということだ。人生が生きるに値するか否かを判断する、これが哲学の根本問題に答えることなのである。」(12)

・ホメロス、人間の内でもっとも聡明なシーシュポス、「神々に対して軽率な振る舞い」「神々の秘密を洩らした」ため「休みなく岩をころがして、ある山の頂に運び上げる」「岩はころがり落ちてしまう」「無益で希望のない労働」という刑罰。「この神話が悲劇的であるのは、主人公が意識に目覚めているからだ」(213)。

↓

４．反抗：『反抗的人間』(1951)。自殺でも革命でもなく、反抗。

自殺を不条理な運命を見つめない態度として退ける。不条理を明晰な意識のもとで見つめ続ける態度を「反抗」。それが生を価値あるものにする。

「反抗的人間とはなにか？　否と言う人間である」、「反抗者の持つ「・・・する権利がある」という感じに、基づいている」(17)。反抗する人間としてのイエス。

５．「神の死」の時代の誠実さ・真理。イエスへの共感。ジッドからカミユへ。

10．近代文学３：ドイツ文学

（1）宗教改革とルター訳聖書

０．聖書：原典と翻訳

１．ルター(1483-1546, 1517)のライフワークとしての聖書翻訳

新約聖書：1522 年翻訳完成　　旧約聖書：1534 年翻訳完成

２．律法から福音へ

「ルターの宗教改革的発見は、聖書を人間に実現可能な掟の書として見ないと捉えたことにある。律法のことばは、人間を自分の弱さに徹底して直面させる。ルターは絶望のどん底の中でようやくそのことに気づかされた。そして、その絶望のふちから、聖書のもうひとつのことばである「福音」へと一挙に反転する。」(徳善、169 頁)

３．アントワーヌ・ベルマン『他者という試練――ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房、2008年。

「ルターの翻訳の歴史的意義」「「原典の特徴」にこだわる「批評的翻訳」を断念することでルターは、一般のドイツ人にも読むことができ、新しい宗教意識、つまり宗教改革によりもたらされた意識に対して揺るぎない基盤を提供しうる翻訳を作り出すことができた。」(52)

「ルターは最初から聖なるテクスト(Heilige Schrift)のドイツ化すなわち Verdeutschung を目指した。」「ルターの課題とは、良いドイツ語(gute Deutsch)で書かれたテクストを信者のコミュニティに供すことだった」(53)

「良いドイツ語とは民衆のドイツ語なのである。」「二重の企て」「先験的に方言でしかない自分自身のドイツ語、すなわち高地方言(Hochdeutsch)で訳すこと。だが同時に、まさにこの翻訳過程を通じて、一地域方言にすぎぬそのドイツ語を全国共通のドイツ語へと、一種の共通語へと高めること。」(54)

「一般化された民衆言葉」「高ドイツ語を、何世紀にもわたって通用するような書かれるドイツ語の媒体へと仕上げた」「偉大な「宗教改革者」であると同時にルターはそれ以降、作家、言語の創造者とも見なされるようになる。」(55)

「爾後ドイツは、宗教的・政治的というばかりか文学的いも、ルター以前とルター以後に分かれることとなる。」(57)

「聖書の言葉を信徒の共同体に開くことは」「同時に」「彼らに聖書固有の話し方を伝えることでもある点をルターは理解していた。」(63)

「ひとつの固有の国民文化の形成および発展は、異なるものとの徹底的かつ決然たる関係としての翻訳を媒体としうるし、またそうでなくてはならないことをもルターの聖書は示唆しているからだ。」(65)

（２）ドイツ文学とキリスト教――ゲーテ『ファウスト』

３．錬金術師ドクトル・ファウスト伝承（15 あるいは 16 世紀）

古代の魔術的異教的伝統＋キリスト教：科学・呪術・宗教との結合

マクロコスモス（大宇宙）とミクロコスモス（人間）の照応関係

４．戯曲『ファウスト 第一部・第二部』(岩波文庫)

・古代異教とキリスト教→ファウスト博士（錬金術家＋キリスト教神学者）

・ヨブ記のモチーフ：「舞台の前曲」「天上の序曲」(主、天使の群、後にメフィストフェレース、三人の首天使進み出る)。

主：「お前は、あのファウストを知っているか」

メフィスト：「さあ何をお賭けになります。もし旦那様が、あの男をそろりと私の道の方へ連れこむことをお許しくださるなら、あれを旦那様から奪いとってご覧に入れますが。」

＜ヨブ記＞

2:1　またある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来て、主の前に進み出た。2 主はサタンに言われた。「お前はどこから来た。」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。3　主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。お前は理由もなく、わたしを唆して彼を破滅させようとしたが、彼はどこまでも無垢だ。」4 サタンは答えた。「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。5 手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんなさい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」6 主はサタンに言われた。「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな。」7 サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のてっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。

・ヨブ記１～２章（神とサタン）

「ああ、おれは生まれてこねばよかった」(4596)、「わたしの生まれた日は消え失せよ」(ヨブ 3.3)

５．神学者ファウスト

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」(ヨハネ 1.1)

第一部・書斎（一）

「神聖な原文を好きなドイツ語に訳してみたくなった。」(1221/22)

「こう書いてある、「太初に言葉（Wort）ありき」」(1224)

「こう書いてみる、「太初に意味（こころ Sinn）ありき。」」(1229)

「こう書いてあるべきだ、「太初に力(Kraft)ありき。」」(1233)

「確信をもってこう書く、「太初に業(Tat)ありき。」」(1237)

・「1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

4 神は光を見て、良しとされた。」（創世記１）。

ダーバール（ヘブライ語）／ロゴス（ギリシャ語）

前へと駆り立てる	集める・秩序づける
話す	話す・計算する・思惟する
言葉	言葉
行為	理性

ゲーテの「ファウスト博士」は、ロゴスからダーバールへと遡及している（？）

６．永遠の女性・上から下へ、そして上へ引きあげる

「すべて無常なるものは
ただ映像にすぎず
及び得ざるもの
ここには実現せられ、
名状しがたきもの
ここには成し遂げられぬ。
永遠なる女性は
われらを引きて昇らしむ。」（第二部、495）

７．「瞬間に向かって」「留まれ、お前はいかにも美しいと。」

天ら降ってきた天使たちにファウストの魂は救い出される。彼の魂が赦されて天国に入ることができるように、かつての愛人グレートヘンが贖罪の女として現れ、聖母に対して恩寵を願う。永遠の女性は、彼の魂を導いて昇る。

＜参考文献＞

１．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館。
２．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局
３．ティリッヒ『ティリッヒ著作集』白水社。特に、第 7 巻と第 9 巻。
４．安森敏隆・吉海直人・杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社。
５．佐藤泰正編『文学における宗教』笠間書院。
６．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
７．河崎靖『ドイツ語で読む『聖書』――ルター、ボンヘッファー等のドイツ語に学ぶ』現代書館。
８．ゲーテ『ファウスト　第一部　第二部』岩波文庫。
９．ユング『パラケルスス論』みすず書房、『心理学と錬金術Ｉ、II』人文書院。
10．ブライアン・イーズリー『魔女狩り　対　新哲学』平凡社。
11．Jaroslav Pelikan, *Faust the Theologian*, Yale University Press, 1995.
12．水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」
（武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社）
13．手塚富雄・神品芳夫『増補　ドイツ文学案内』岩波文庫。